



**坂田和人** Kazuhito SAKATA  
 1955年生まれ。映像ジャーナリスト。  
 登山、キャンプなどのアウトドア分野の撮影を得意とし、文化論的な視点を交えたアウトドア読み物を執筆。アメリカではナバホ居留区で、ネイティブアメリカンの人たちと交わり生活をともにする。また南米アマゾン川流域で、原住民マチゲンガ族の集落に入り、住民と一緒に狩猟採集生活を体験。ネパール、カムチャッカ、環太平洋、アフリカなどを探索し、手つかずの自然を堪能し、異文化交流を果たす。代表的著書に「キャンプに連れて行く親は、子供を伸ばす!」(扶桑社)「キャンプに連れて行く親は、子供を伸ばす!」扶桑社 <http://www.fusosha.co.jp/book/2009/05986.php>

**福島雅邦** Masakuni FUKUSHIMA  
 1956年生まれ。一般社団法人 日本RV協会会長。  
 1991年、キャンピングカービルダーとして日本で初の量産型軽キャンパーを製作。1998年には日本初の本格的クラスAキャンピングカー(フルコン)を開発し、日本のキャンピングカー産業に多大な功績を残す。一方ではキャンプを愛し、自然体験が「人間力」を高めることに人一倍高い関心を示し、自らそれを実行。テクノロジーとネイチャーの融合による新しいキャンピングカー文化の創出に尽力する。

| 特 | 別 | 対 | 談 |

# キャンピングカー旅行は子供の感性を伸ばす

映像ジャーナリスト **坂田和人**さん **SPECIAL TALK** 日本RV協会会長 **福島雅邦**さん

## 幼い頃の自然体験が一生を支配する

【司会】 子供がキャンピングカー旅行やキャンプを楽しむことで、想像力が育まれたり、感性が鋭敏になるということを実感しているファミリーが増えています。アウトドア体験がなぜ子供の心を豊かにするのか。それについて、それぞれご自身の体験などを交えて語っていただきたいと思います。

【福島】 私は群馬県の農家の次男坊に生まれましたから、物心がついた頃から川原や山奥といった自然が「遊び場」でした。野原に生えている木にシートをくりつけて屋根や囲いをつくり、その中で寝泊まりしたり、川原で魚を手づかみにして焚き火で焼いて食べたり…。

そういう体験を繰り返して育ってきたので、「遊び」というものは、自然を加工して自分たちで創り上げるものだという意識を小さい頃

から身につけたね。

また、集団で遊んでいましたから、子供たちの中でも年長者が小さな子の面倒をみるとか、危機回避の術を教えるとか、そういうことを当たり前で思いながら遊んでいました。

【坂田】 僕の場合は、父親の影響が大きかったんです。オヤジがスキーのノルディック競技の選手だったので、物心のついた頃から父親の肩車で雪の上を滑ったりしていたんです。だから自分でスキーを始める前に、

すでにプロの選手が雪の上を滑るときのスピード感などを身につけたように思います。

それと同時に、冬山の厳しい吹雪とか、それが頬に突き刺さるときの痛みみたいなものを学びました。でも、それが「辛さ」として体験されるのではなく、そこに「快感」があることも知りました。

子供時代に、そういう「自然」を楽しむという感覚が身についたから、アマゾンの森の中で、原住民たちと暮らすような体験にもすんなりなじむことができたように思います。



【福島】 結局、何が人間が一番ワクワクさせるかということ、それは「冒険」なんですね。私たちが小さい頃に一番熱中したのは、洞窟の探検なんですよ。みんなでヒモで身体を結んで、恐る恐る洞窟の中に入って行くわけですが、コウモリの大群に接して怯えたり、出口を見つけれなくて不安に駆られたり…。

でも、そのワクワク感というのは、生涯忘れられない記憶として残るんですね。

そこで感じた「怖さ」が原点にあるから、大人になって、野山や川原でテントを張るとき

も、「ここは鉄砲水が出ないだろうか」、「落石がないだろうか」などという警戒心を持つようになったんですね。まさに「冒険」が人間の「予知能力」を高めるということを身を持って体験したように思います。

【坂田】 そう考えると、現代の都市生活になじんできた子供たちというのはかわいそうですね。体験があっても、それは自分の身体が学んだ体験ではなく、あくまでもテレビやゲームといった二次体験でしかない。だから、応用力が効かない。

最近の若い人たちのなかには、街の中を歩いているときに他人の動きをうまくかわせない人がいます。

それは、平らに均されたコンクリートの上しか歩いていないことが原因だという気がするんですね。自然の中を歩いていけば、まず同じ地面が続くことはあり得ない。砂利道もあれば、草地もある。さらに高低差もある。そのような地面の変化を感じながら歩くことによって、身体の重量バランスを取る“センサー”が養われるんですね。

また、落ち葉の上を歩いたりすれば、踏みしめるときに足裏に伝わる柔らかさとか、サクサクと心地よく響く足音などが脳内情報として蓄積されます。そういうことの繰り返しから、「大地の神秘」に思いを馳せる気持ちも生まれてくると思うんです。

それは、文学を読んだり、絵画を鑑賞したりするのと同じことで、自然が理解できるようになれば、芸術も理解できるようになる。両者とも「美」を感じる心を養うわけですから。

【福島】 基本的に、人間が「何かを学ぶ」ということは、マニュアル化されていないものから「学ぶ」ということだと思うんです。たとえば、自然素材を探して自分でおもちゃを作るとするじゃないですか。木の枝を切りとって、

ナイフで刻んで舟とか人形を作ったりするとき、自然の中に転がっている木の形なんかすべて違いますよね。生木なのか乾燥した木なのかによっても、ナイフを入れたときの手応えが違う。自然はマニュアルどおりに出来ていない。まずそこを知ることが大事ですね。

【坂田】 そのとおりですね。僕は、人間の「心」というのは「感性の集合体」だと思っているんです。感性というのは、見る、触る、聞く、嗅ぐ…要するに五感のバランスの上で成り立つものですよ。



ところが、都会では全ての感性が過度に刺激されてしまうため、逆に五感が麻痺してしまいます。だから心と肉体のバランスが取れず、ノーマルな感性が育たないのではないのでしょうか。

現代人は物質的な利便性が高まることを「文明の進化」として捉えがちですが、そういう考え方は、むしろ人間の身体能力や発想力を衰えさせるように思います。不便さに基づく当たったときに、それを自分の身体と頭脳を使って克服していくことが大事なんですね。



